

木の目草の芽

2019年4月8日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-4433

年間購読料 1,000 円
申込 : 047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便替替00180-4-710688
加入者名 : 川口 章子

ニホンジカから高山植物を守る 長野県伊那市の取り組み

「南アルプス食害対策協議会」発足から10年を経て

インタビュー 白鳥 孝さん (伊那市長・日本山岳会員)

ニホンジカの食圧により高山植物の危機に見舞われた南アルプスで、その状況を打開するためにいち早く動き始めたのが、現在、伊那市長を務めていらっしゃる白鳥孝（しろうりたかし）さんでした。

2007年には「南アルプス食害対策協議会」を立ち上げ、国や県、関係自治体を巻き込んで仙丈ヶ岳山頂付近で防鹿柵設置活動が始まり一定の成果を挙げ、近年はドローンなどの最新技術の導入も模索しています。その10年にわたる取り組みの歩みと、山への想いをうかがいました。



第137号 〈目次〉

- P.1 インタビュー
ニホンジカから高山植物を守る
長野県伊那市の取り組み
伊那市長 白鳥 孝
- P.6 浅間山におけるシカの
植生影響 下野 綾子
- P.8 鳥海山と私
～先輩方が守った自然～
和田 薫
- P.9 連載コラム
「ライチョウといつまでも」
日吉 健治
- P.10 追悼 安田会員の追憶
埴崎 滋
- P.11 アツモリソウ保護活動を
はじめました 川口 章子

——「南アルプス食害対策協議会」発足の経緯と取り組みを教えてください

この取り組みを始めたのは14年くらい前、前市長に呼ばれて伊那市役所に入ってからのことになりますが、その数年前から、なんとなく山の様子が変わりだすと気づき始めていました。沢登りなどで山に入りますが、いつ行っても植物が無い。花の仙丈というのに何もないじゃないかと思っただけでよく観察してみると、食べられてしまっているわけです。まるできれいに手入れされたゴルフ場のようです。これはまずいということで、環境省や長野県環境部、林務部、森林管理署、林野庁にも行きましたが、調査はしていますという話でした。調査ではなくて手当していかないとまずいですよという話を再三していたのですが、その

まま何年も過ぎていってしまうので、それならば伊那市が独自にやろうということでも立ち上がりました。伊那市が単独でやることもできたのですが、学術的な研究もしなければいけないでしょうし、許認可の関係もあるでしょうし、やはり色々な人の関わりを得ようということ、2007年、当時の市長を会長として協議会を立ち上げるようになりました。同時に(財)日本自然保護助成基金の理解を得られて助成金をいただくことができ、それを元にして一気に始めたのです。構成団体は、南信森林管理署・長野県・飯田市・伊那市・富士見町・大鹿村・信州大学農学部です。

翌年2008年の夏から早速、仙丈ヶ岳一帯のお花畑に防鹿柵の設置作業をスタートしました。環境省と協議会が協働でエリアを担当して柵を設置しました。しかし柵が雪に耐えずに潰れてしまうので、最初のうちは試行錯誤でした。環境省も最初は金網のしっかりしたものを設置していましたがやはり一冬で潰れてしまいました。結局、雪が解けてシカが上にあがる前に自分たちが行ってネットを張り、雪が降る前に全部外して下ろすというのを繰り返すしかないだろうということになり、それを続けて今年で11年目になります。協議会はみんなボランティアで、最初からずっと参加している人もいます。天気が悪い日も多いですから容易ではありません。雨の中で手を挙げながらの作業なので雨水が袖から入ってきたりします。大変な作業を継続してやってもらっています。そうして協議会がこれまでに設置したのは12箇所です。総延長は1100メートル近くになっています。



—— 順調に再生していますか。植生は回復傾向にはありますが、本来の姿がどうだったのかがわからないという問題があります。かつてのお花畑の記憶を頼ったり、昔の写真なども参考にはしているのですが。例えば馬の背にあった植物群は一度全部消えてしまい、困ってから戻っているのが、ミヤマキンポウゲとかシナノキンバイとか数種はあるのですが、それが本当に元の姿かどうかというところです。高山植物は条件の極めて悪い場所で育つわけで、植物が芽を出して増えていくというのはやはりステップが踏まれているないと、最後の極相的な植物群というのはできないのかなと感じています。標高3000メートルのような場所です。詳しい調査研究を行うのは難しいことです。植物群が食害で一旦消えてしまった時に残ったのはマルバダケブキとコバイケイソウで、それが優占種になってしまっているわけです。今はそれを刈り取ったりしているのですが、回復の様子を見ると、最初に出てくる植物はイネ科の植物、その後にポツポツとハクサンフウロとかシナノキンバイなどが戻ってきて、テガタチドリなども次第に増えてきていますが、最近はまだ植生が若干変わっているかなという

感じもあります。気候にもよるでしょうし、極相的な花畑が一旦なくなってしまうと、戻る過程というのがどのようなかがわからないですね。そこも併せて信州大学の方に研究してもらっています。

それと同時に、北沢峠に行く南アルプス林道や高山帯に入ってくる林道に沿って、ピロードモウズイカなどの外来植物が増えてきていたので、それも5年くらい前から、ハイキング気分のみんなで下から歩きながら抜いています。最初は軽トラ何台分もありましたが最近はまだ1台分にもならないくらいに減りました。

——シカ対策としてくくり罠の設置もおこなっていますね。

全体的な話をしますと、当初は南アルプスだけでも推計で3万3千頭くらいのニホンジカがいるとされていきました。それですは猟友会のメンバーを増やさなければということ、免許取得時や更新時の補助の見直しや、取得や更新手続きを週末でも受け付けてもらえるように県に交渉しました。そうしたら猟友会のメンバーは増えてきて今は210人くらいはいます。猟友会員が増えているという

自治体は珍しいです。特に罠の免許を持つ人が増えています。伊那市の職員にもけっこう取得してもらっています。そうして免許を取る人たちを増やす努力をしています。走っているシカなんて、そう簡単には鉄砲では当てられませんから。とりあえず罠が最も効果があるので罠の開発をして、それで猟友会の皆さんに獲ってもらっています。

一番多く獲れた時は年間5000頭から5500頭、最近では減ってきていて1000頭獲れるかどうかという程度です。ただ、数が減ってくると猟友会の皆さんがパトロールするのが大変になってきます。罠にかかっていなくてもとにかく毎日見に行かなければならない。それで最近、シカがかかると遠隔でもわかるような装置を開発しました。シカが罠にかかったという情報が携帯電話に入るので、ピンポイントにそこへ行って処理できます。これは「ハッカソン」(技術者がソフト開発などのアイデアを競い合う催し)で開発されました。「伊那でこんなことを困っています」という話をする、メンバーの皆さんが一晩中でも意見を出し合いながら考えてくれて、それで出来あがってきたのがこのワナセンサーで市販もされる予定です。1台2万円程度

ですが、もう少し価格を抑えて全国で使えるようにできたら良いとも考えています。



——高山や鳥獣保護区での捕獲の難しさもあるでしょうか。

趣味のハンティングは別として、有害鳥獣対策ということであれば保護区の縛りはないのですが、やはり登山者の方など、見ている方がいるとトラブルも発生しますので猟友会もあまりそういうことは積極的にはやりたくない部分がありますね。国も県も現場の状況はなかなかわかりにくいと思いますが、私たちは一番近い距離で行政をやっているの、現場の惨状をよく知っていますから、この課題

については徹底的に対応しろと言っています。猟友会の皆さんに嫌な仕事をお願いしているわけです。シカを撃って全部穴に埋めていますが、その作業も大変なことです。捕獲には報奨金を出しています。

——ドローンにも注目されていますね。

平成29年に伊那市で行ったドローンフェスティバルでは、10頭のシカの剥製にカイロをつけて39℃くらいの温度にして、それを山の中に隠してドローンで探し出すというコンペを実施しました。コントローラーで操縦するものや自動飛行のもの、また熱センサーでの探査や3Dカメラでシカの形を探すものなど、いくつかパターンがありました。標高1800メートルの山の中で実施しましたが、雨が降ってきたり風や霧が出てしまい、競技ができない状態でした。それでも数チームが「この状態でも飛ばせるのでやらせてほしい」と言って悪天候の中でもシカの剥製を探してきました。それができたので、実際に今年3月、広葉樹の山で赤外線カメラで試してみたのですが、場所を選べば、結構シカが写って使えるなどという手応えでした。シカは冬になると30頭から50頭の群れを作り、

常緑樹の下でじっとしているので、ドローンを使ってその群れを捕まえられれば良いわけです。現在、GPSをつけたシカを3頭、場所も若干変えて放して、そのための実験をしているところですよ。

——ジビエへの活用などはされていますか？

昔はやっていましたが、長野県の解体のガイドラインは、日本で最も難しくなっています。シカのお腹に当たったものはダメ、でもシカってお腹ぐらいしかない。あとはお尻と肩の部分に少し肉があるくらい。ところが鉄砲を打てばみんな腹に当たる。運良く違うところ、例えば頭に当たったとしても、1時間以内に解体して冷凍しなさいというのです。それを山の中でできるはずはありません。ですからジビエに使うというのは土台無理とわかったので、ペット用のジャーキーにしてみました。それが結構売れたのですが、ある時シカの毛が入っているというクレームがあった。結局それもやめてしまいました。

——シカが最近入り始めたというような地域では、まずは何をすべきでしょう

守るべき植物などがあるのであれば、実態

調査ばかりしている場合ではないので、とにかく早く叩くことです。シカは倍々ゲームのようなもので急激に増えますから早く捕まえるしかありません。シカの歩く経路というのは大体わかるので、そこに罠をかけて対処するしかありません。

実は最近、中央アルプスへも南アルプスのシカが天竜川を泳いで渡ってしまっただんどん増えています。中央アルプスで気をつけなければいけないのは花崗岩の山であることです。風化してマサ化しているので、下草を食べられてしまうと、雨が降れば直接表土を流し始めて、大崩落、深層崩壊が始まる可能性ががあります。ですからとにかく徹底的にシカの侵入を防ぐために、水系単位で尾根ごとに囲っています。シカはネットに沿って歩くのでそこに罠をかけて獲っています。ネットを上手に張ってそれに沿って歩かせて誘導し、処理するというのもできると思います。崩落は南アルプスでも始まっています。一般的に高山帯でも雨が降れば植物がクッションになってゆっくりと地中に浸透していきますが、下草が全て消えてしまえば降った雨が直接表土を流します。それが小さな流れになるとクランクができて突然落ちたりします。

伊那がシカ対策を始めた当初も、省庁は調査をしてはいましたがそこから先に進まなかったため、伊那市で独自に守ることになりました。シカはゼロになったように見えてもまだ居るものですし予想以上に増えます。とにかく早く手を打って高山植物を守ることです。

——最後に、白鳥さんの山との出会いをお聞かせください。

私は植物が好きで、昔はドウランを下げて山へ入っては珍しいものを探していました。植物や岩魚釣りから山に入ったという感じですね。おのずと高山植物にも興味があつて、中学生の頃からよく高い山へも登って、採取できないところでは植物を眺めていました。そのうちに沢登りや岩登りも始めるようになりました。学生時代は沢登りを専門にやっていた、社会人になってからは地元の高岳会にも入って岩登りをやっていました。最近はおまわり行けなくなりましたけど。

——お気に入りの山はありますか？

南アルプスなら仙丈ヶ岳と塩見岳。車のナンバーは仙丈の標高、3033にしています(笑)。そして女房の車のナンバーは塩見岳の

標高です。中央アルプスだったら空木でしょう。我が家からは南アルプスがほとんど見えます。この時期の南アルプスはとてもいいですよ。



〈インタビューを終えて〉

お忙しい時期にもかかわらず、とても丁寧
にインタビューに応じてくださいました。高
山植物の危機を目の当たりにした白鳥さんが
スピード感と柔軟性をもって、リーダーシッ
プを発揮しながら協議会を立ち上げた経緯が
あったこと、また地道な活動を継続しながら
常に新しい方法を模索されていることを知り
ました。

今回のお話から、高山帯にシカが侵入する
前、もしくは増えてしまう前の段階で私たち
にできることのヒントも得られました。まずは
普段から山の植物をよく観察し、変化にい
ち早く気づける人が居ること。そして消失に
至ってしまった場合に備え、植物群を構成す
る種をできるだけ記録として残しておくこと
など。その役割を私たちが果たせるのではな
いかと思いました。

伊那市の山岳環境への取り組みは、他にも
携帯トイレやライチョウ保護などにもわたり、
そのお話も少しかがいましたので、後日改
めてご紹介させていただきます。

(聞き手) 川口章子・元川里美 2019年

3月11日伊那市役所本庁舎応接室にて

写真提供…伊那市

〈報告〉 浅間山におけるシカの植生影響

自然保護委員 下野 綾子

私は学生時代、浅間山の湯の平で植生調査を行っていた。当時カモシカはよく目にしたが、ニホンジカの気配は全く無かった。それから十五年以上たち、湯の平にもシカが登ってくるようになった。湯の平に設置されたセンサーカメラの記録によると、ほぼ毎日シカが撮影される地点もあり、今後、シカの植生影響が増大すると予測されている。

最近撮影した写真を十年前のもの比べてみると、キク科のマルバダケブキが相当に増えていて目を見張った(図一)。マルバダケブキはシカの嫌う不嗜好性植物として知られている。シカの植生影響が強くなると不嗜好性植物が増えて、嗜好性植物が激減するため、シカが増えている山岳域の多くでマルバダケブキの増加が報告されている。さらに影響が強くなると、植生が衰退することになる。シカによる植生影響の現状を知るために以下の調査を行った。

(一) 剥皮調査

浅間山湯の平に二〇m四方の調査区を三ヶ所設け、樹高一三〇cm以上の樹木の胸高周囲長を計測し剥皮数を記録した。



図1 浅間山湯の平の10年間の比較。同じ地点から写真を撮影した(左の写真は霧のため背景の山が隠れている)。黄色く見えているのがマルバダケブキの花。

湯の平の主要樹種はシラビソ、カラマツ、ナカカマドからなる。この三種以外にもタカネザクラ、ゴヨウマツ、ダケカンバ、ハクサンシヤクナゲなどが見られるが、調査区内には五本以下しか生育しておらず、主要樹種三種に着目した。

シラビソ、ナカカマドは高頻度で剥皮されていたが、カラマツは全く剥皮されていなかった。シラビソでは胸高周囲長が四〇cm未満の個体の剥皮率が多く、剥皮個体の枯死率は三七%であった(図二)。ナカカマドの剥皮率は九〇%であった。浅間山湯の平と樹種構成が似ている富士山の亜高山帯で行われた剥皮調査でも、シラビソやナカカマドに選好性があり、胸高周囲長が短い若い個体が好んで剥皮される傾向が報告されている。浅間山でこのまま剥皮が続けば、森林更新が妨げられる可能性があるだろう。

(二) 植生調査

湯の平の中には、長野県の保護上重要な植物群落である高層湿原があり、二〇一六年に防鹿柵が設置された。この柵内に、私が学生時代から植生調査を行っていた場所が含まれている。そこで、二〇一八年に同じ場所で再度植生調査を行い、シカの影響が無かったと考えられる過去のデータ(二〇〇一年・二〇〇三年)

と比較した。五〇cm四方の調査区を三七個設置して、調査区内の植物種を記録した。その結果、調査区の中には三五種出現し、過去に見られた種のうち一種(チシマゼキシヨウ)を除き、全て確認できた。このチシマゼキシヨウはもともとわずしか見られなかった種である。今回の調査枠の中にたまたま含まれなかったため記録されなかったと考えられる。また各種の量(出現頻度)にも大きな変化は見られなかった。そのため、防鹿柵は植生に大きな影響が出る前に設置されたと考えられる。今後は、防鹿柵の外でも調査を行い、草本への影響がどのくらいあるのかを評価する予定である。剥皮の多さを考慮すると、草本への影響も小さくない、もしくは今後顕著になると考えられる。

また、より簡単にできる植生モニタリングの方法を検討している。調査区を何個も設けて、植物を全て記録するといった方法は時間も知識も要するため、広い面積で行うことが出来ない。広域で行う簡便な方法として、ドローンの利用を考えている。冒頭に出てきたマルバダケブキは大きな丸い葉が特徴的である。ドローンで上空から撮影してもその葉はよく識別できる(図三)。こうした写真画像から、マルバダケブキの被覆面積を計算すれば、毎

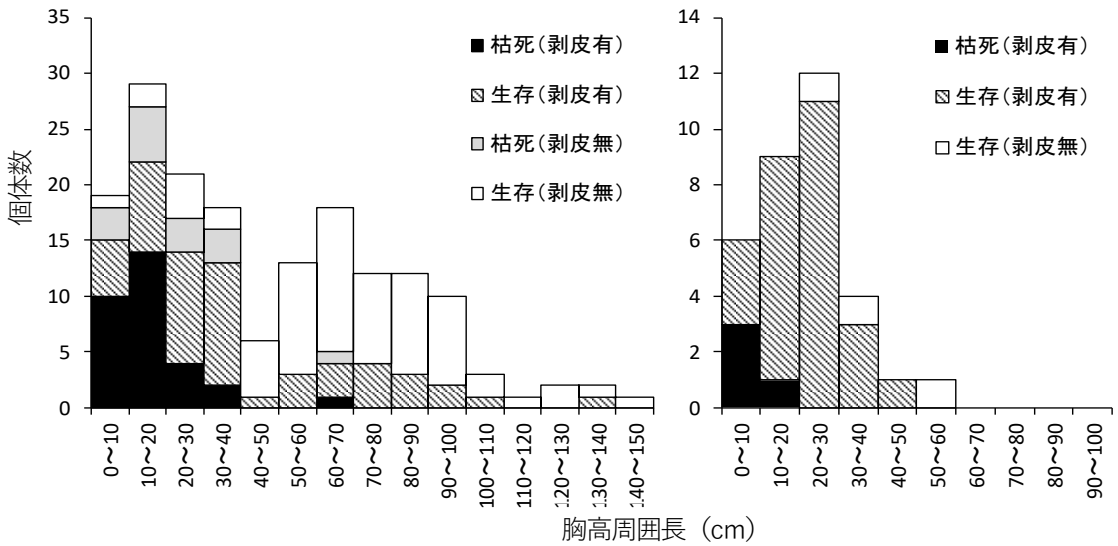


図2 シラビソ (左) およびナナカマド (右) の胸高周囲長の分布と剥皮

図3 ドローン画像例

(2017/8/21 撮影) .
黄色いのがマルバダケブキの花、丸い葉がマルバダケブキの葉に相当する。



年のマルバダケブキの増減を簡単に推定することができるだろう。

鳥海山と私

先輩方が守った自然

自然保護委員 和田 薫

唐突だが、私は、山の中で一番鳥海山が好きだ。登山をかじり始めた時は、名前も知らなかった。しかし、山の先輩方が声を揃えて、「鳥海はいいよ」「ほー、ちようかい」なんてジョークを言っているのを(何度も)聞いていて、興味を持つようになった。

初めて鳥海山を拝む機会を得たのは、2017年に月山を訪ねた時のことだ。月山からみた鳥海山は、とにかく大きく、そして神々しかった。

ついに鳥海山に登る機会に恵まれたのは、2018年5月の連休のことだ。バックカントリークラブの山行で、鳥海山にスキーで登り、そして滑走しようという計画であった。憧れていた鳥海山は、私が心に描いていたよりもさらに大きく、そしてもう5月というのに、まだまだたつぷりと雪がついていた。その日は風が強く、あいにく登頂することはできなかつたが、山に拒まれたような気がすることはなく、その雄大な姿は、また来いよ、

と私に言ってくれているかのようで、ますます憧れが強くなった。

そんな鳥海山に、1980年代にスキー場開発計画が持ち上がり、そしてそれを白紙撤回にまで持ち込んだのが日本山岳会の自然保護委員の先輩方であるということを知ったのは、本当に恥ずかしいのだが、最近のことであつた。正確に言えば、「鳥海山にはイヌワシがいるから、スキー場がないんです」ということだけは聞いていた。

ふとしたきっかけで、日本山岳会百年史に収められた松本恒廣氏の「日本山岳会と自然保護」を読み、白紙撤回に至る経緯を知ることができた。山形支部自然保護委員の佐藤淳志氏を中心に、山形支部の方々が厳冬期も含めて山に交代で泊まり込み、それこそ命をかけて調査を続け、その結果イヌワシの生息状況をつぶさに観察し、行政にデータを提出した。そして、開発側はついに計画を撤回するに至つたのである。松本氏が表現するように「雪崩の危険を避けながらの観測は山岳人でなければできぬもので」、日本山岳会だからこそその成果であつたろうと思う。

先輩方が命をかけて守ってくれた鳥海山。あの時、もしもスキー場開発計画が実現してしまつていたら。リゾートホテルができて、頂上までリフトが開通していたら。私の憧れは今と同じ姿ではなかつたであろう。その話を知つてから、ますます鳥海山は私にとって特別な山となつた。

私も、自然保護委員の一人として先輩方に恥じないような、大げさかもしれないが自分が一生をかけて、一生懸命になって取り組める大事なものを山の中で見つけたい。



鳥海山に臨む

連載コラム

「ライチョウといつまでも」

自然保護委員 日吉 健治

《④ニホンライチョウの一年その1》

多くの野生動物は、一年をサイクルとして季節に応じた暮らしを送っています。

厳冬期以外は標高2400m以上の高山帯で一生を過ごす日本のライチョウも、高山の四季に応じて暮らしています。

厳冬期を除くライチョウの暮らしは、先述の矢沢米三郎氏の研究に続き、信州大学・羽田健三先生らにより詳細に解明されました。

その解明結果に沿って、春の雪解け期からライチョウの暮らしを追っていきましょう。

3月下旬、高山帯ではまだ厳しい冬山ですが、稜線では少しずつ雪解けも始まります。

厳冬期には餌を求め森林限界付近まで下りていたライチョウも、稜線の雪解けが始まると、まずオスが雪解けの状況を確認めるかのように稜線に姿を現し始めます。

この3月下旬から4月はオスがなわばりを形成する時期で、より良いなわばりを得るためにオス同士で激しい争いを繰り広げます。

威嚇、追いかかけ合いから始まった争いは、

最後には激しい空中戦となり、4月中頃なわばりが確立されてゆきます。

この頃になるとメスもオスのなわばり域に姿を現すようになり、つがいが成立します。

ライチョウは基本的に一夫一妻で、一度つがいが成立すると毎年同じ相手とペアを組むと言われています。

つがいが形成された4月下旬から7月上旬は、繁殖活動期になります。

この時期のオスの主要な役割は、なわばりの維持とメスの護衛で、半径300mほどのなわばりの中に侵入しようとする他のオスを追い出します。

一方メスは巣作りから産卵、抱卵といった一連の繁殖活動を行います。

巣は背の低いハイマツの根元に作られますが、その巣を見つけるのはかなり困難で研究者もその発見には苦労されています。

6月になると産卵が始まり、2日間置きに1卵ずつ、平均6卵ほどが産み落とされます。

ライチョウの卵は、見た目にはウズラの卵に似ていて斑点模様があり、ニワトリの卵を一回り小さくしたくらい大きさです。

メスは、卵が全て産み落とされるまで抱卵を開始しません。これは全卵同時に孵化させ

るためです。

抱卵を開始したメスは、ほとんど巣を離れることはなく、1日に朝夕2回、1回20分ほど食事と砂浴びのため巣を離れますが、この時必ずオスが寄り添いメスを見守ります。

メスが抱卵を始めてからおおよそ23日後の7月上旬頃に卵が孵化し、雛が生まれます。

先に述べた通り1日のうちに全ての卵が孵化し、翌日にはメスは雛を連れて巣を離れ、二度と巣に戻りません。

雛が生まれると、これまでなわばりを守りメスの護衛をしていたオスは、なわばりを解き家族とは離れ別行動をするようになります。

この後のライチョウの暮らしは次号にて。

(参考)ライチョウを絶滅から守る 中村浩志、小林篤(2018)

◎人工繁殖中のニホンライチョウ公開

各地の動物園館にて人工繁殖中のライチョウが3月15日より公開展示されています。現在公開展示中の園館は左記の通りです。

富山市ファミリーパーク、大町山岳博物館、いしかわ動物園、那須どうぶつ王国、恩賜上野動物園

《追悼》

安田会員の追憶

埴崎 滋

安田二三男会員（会員番号14015）は2004年の入会であり、石川支部自然保護委員を重任されていましたが、昨年、旧盆明けの8月22日に71歳で急逝されました。その一か月前の7月8・9日は当支部で自然保護全国集会在が、古湯「辰口まつさき」で開かれ、地元和気町在住の安田会員には、成案後短時日の制約に拘わらず能美市を始め石川県白山自然保護センター・いしかわ動物園・白山高山植物園と



の各種接渉を持ち前のフットワークの軽さと、温和な人柄を以って着実に押し進められて、多大な成果に結びつけるのに漕ぎつけました。

訃報を知り山野を跋扈する屈強なイメージの日常からは、一瞬信じがたく、言葉を失った記憶が今も蘇ります。長年、司法警察の職で県下の様々な地域の勤務を経る間に、その地の自然環境に接し、造詣を深めることが出来たと語っておられました。職を定年前に辞されてからは、居住の能美市に平成18年にスタートした「能美の里山ファン倶楽部」の設立運用に副会長でも従事され、里山コミュニティの内容充て足補充に文字通り心血を注がれる日々でした。その活動は「里山の自然と暮らす」をテーマとする、能美ほっこりまつり（ほっこり充分）に順調に、ほのかに温かいの意、カタクリ群生保全、キノコ植生、山菜畑、薪炭づくり、川遊び、森の保育園、里山クラフト、ユズ栽培復元と枚挙にいとまない多岐に亘るものでした。余談ながら、2020年春、オリンピックの年にNHK連続テレビドラマで「東京五輪マーチ」「六甲おろし」「栄冠は君に輝く」等の作曲の古閑裕而さんが取り上げられることで、この「栄冠は…」の作詞者の加賀大介の故郷として「能美市」にスポットがあたる期待も生まれています。



当支部の恒例「自然観察会」には、プランニングから私にアドバイスを頂き、県下の広範な巡検場所での現地指導で、毎回好評を博すことで継続しています。今年の「観察会」の計画段階でもコンダクター不在で苦慮の毎日ではあります。「自然が重畳に育んだ中に、我々人間が、偶々土足で踏み込むには、それなりのマナーとエチケットが必要」との認識は、私とは常に共有でして、安田会員の背中の大きさを、これからも山歩きの都度痛惜・反芻することになると思います。

謹んで哀悼の意を表します。

（石川支部 自然保護委員長）

〈自然保護委員会活動報告〉

アツモリソウ保護活動を開始

自然保護委員会の活動の一つとして保護活動に参加したいと思いつながら、実行できずにいたところ、2016年6月多摩支部が三つ峠のアツモリソウ保護活動を始めて6年目の活動報告を『たま通信』第26号で知り2017年6月に多摩支部の一員として参加することにした。

三つ峠山荘の主人中村光吉会員の案内でシカによる食害と盗掘から守る防護柵の中に入ると、アツモリソウが見事な薄紅色の花を咲かせていた。

アツモリソウを間近で説明を聞きながら観察ができ、その上27、28輪の花を一箇所で見ただけのこと、保護活動の大切さを強くもった。

観察を終えて、テンニンソウの除草作業をして夕食前の中村さんのアツモリソウの植生と保護活動の講話に聞き入ってしまった、自然保護委員会の活動として参加したいと、委員会で提案することにした。

多摩支部と共催で2018年6月に実

施し委員会の活動として継続することになった。

*保護の場所は河口湖駅前からバスに乗車して三つ峠登山口下車。登山口から徒歩約2時間で三つ峠山荘周辺の山地。

*保護活動場所には山荘の主人中村さんの案内で保護区域の柵内に入る。

保護柵内の中でさらにアツモリソウには囲い柵があり保護されている。

地生ランのアツモリソウは地面に生え自身に適応する菌類を栄養源として生育するので生えている周辺を保護している。

*保護活動は主にテンニンソウの除去。一本一本刈るのではなく出来るだけ根こそぎ除去するのが望ましいと説明される。

シソ科のテンニンソウは根が浅いのだが広く網目状に根を張り種子からの発芽もありしばしば大群落を作る多年草、背丈は1メートルぐらいになり、葉が重なり日光は下に当たらず他の植物の種子は発芽できず他の植物の育成を妨げるアレロパシー（植物が化学物質を生産、排出し周辺の植物に多くは有害な作用及ぼすこと。他感作用。

遠隔作用。出典…大辞林)を出すので除去。

継続の大切さを知る

2017年、2018年と2回参加して、感じたことは、約35年前に中村さんが盗掘から激少したアツモリソウ保護に声を上げ、連綿と継続されて来た事だ。

まず、県知事に提言し山梨県高山植物の保護に関する条例を施行、監視員制度を制定し環境省と交渉をしてアツモリソウ盗掘から保護し生育に害を及ぼすテンニンソウの除去作業、シカの食害から守るための柵の機材の提供依頼、柵作りはボランティアで作りと多くの人が協力者となり現在の活動となっている。

その後、この活動を最初から続けておられる方に出会い11月にはアツモリソウの生育している近くに採取した種子を散布する作業にも参加させてもらった。

現在の花のある個体が数百あるのも、遺伝的多様性を持った個体があったことが自生地への復元につながった事を知りこの活動に参加を続けたと思った。

自然保護委員長 川口 章子

自然保護委員会の活動記録◇

（二月度）

報告・連絡事項

①自然保護委員会1月9日（水）19時

*2019年度全国集会・開催場所埼玉県

埼玉支部と共催。

開催日時・7月6日（土）～7月7日（日）

会場 基調講演講師、分科会等を協議。

1月24日（木）川口委員長・埼玉支部自然

保護・高嶋委員長と会場下見と打ち合わせ。

*1月26日（土）恩賜上野動物園のライチョ

ウ学習会・川口委員長、日吉委員参加。

*木の目草の芽・136号発送、1月28日

（月）。川口委員長、小林委員。

*1月31日（木）長野県安曇野の長野県ライ

チョウサポートアーツ・スキルアップ講習会に

川口委員長、日吉委員、和田委員参加。

協議事項

*全国集会の会場、テーマなど。

*来年度の事業計画、予算を検討。

（二月度）

報告・連絡事項

①120周年記念行事委員会 2月5日（火）

谷内理事、川口委員長出席。

②東京多摩支部と共催の三つ峠アツモリソウ

保護活動の日程の調整。6月16日（日）～17

日（月）または23日～24日（月）のどちら

か。

日帰り参加者を考慮に作業日を日曜に設定。

③山陰支部自然保護委員長が岩田氏から谷野

彪氏に。

協議事項

①自然保護委員会2月25日（月）19時

*全国集会会場さいたま新都心・埼玉県男女

共同企画推進センター、宿泊・懇親会会場は、

ホテルブリランテ武蔵野。参加費1万9千円。

テーマ「生物多様性と自然保護」。

分科会は3つを予定。

②ライチョウ講演会開催を検討。

*恩賜上野動物園飼育展示係の高橋幸裕氏と

交渉。5月下旬に開催予定。

③委員の責任と役割について。

④委員会活動計画について。

（二月度）

報告・連絡事項

①山岳団体自然環境連絡会3月19日（火）

*連絡会の幹事の交代で公益社団法人・東京

都山岳連盟が担当。

*規約改正。4月1日より実施。

②木の目草の芽・4月号のインタビュー

3月11日（月）伊那市長・白鳥孝氏（日本山

岳会会員）川口委員長、元川委員、伊那市本

庁舎で。

③携帯トイレの問い合わせと注文が小笠原在

住の延島氏、越後支部、宮崎支部。

携帯トイレ普及周知へ支部にサンプルを送

付する。

協議事項

①自然保護委員会3月11日（月）19時

*全国集会式次第を検討。

支部との交流を深める全国集会にするに

は支部報告の時間を有効に活用するにはど

うしたらいいかを検討。

フィールドスタディの場所の検討。

*植物の定点観察（モニタリング）候補地を

検討。

玉川上水「花マップ」の紹介

玉川上水の植物の春夏秋冬のマップ。植物観

察を生かす活動の指針となる記録集です。活用

をお勧めします。発行されているのは夏・秋・

冬の3部、春は近日発行予定。一部300円（カ

ンパとして）自然保護委員会扱い。

《編集後記》

カタクリは古くは堅香子かたか

ごとと呼ばれ大伴家持が「物部の八少女らが汲

みまがう寺井の上の堅香子の花」と詠みました。

万葉集でカタクリが詠まれているのはこの一首

だけとか。新元号で脚光を浴びる歌人の子の、

越中国守時代の歌です。安田様の追悼を読みな

がら巡りくる北陸の淡い春を想いました。元川